教育士への思い

Recalling what I did as an “Educator”

森 村 久美子^{※1}

Kumiko MORIMURA

東京大学大学院工学系研究科で教鞭をとり始めてちょうど10年が経過しようとしている。上級教育士を認定されてからはまだ2年だが、教育士と名乗るにふさわしい教育ができてきたのかをこの機会を借りて振り返ってみたいと思う。

10年前はまだ講義形式の授業があたりまえの時代であった。大学の講義といえば、教授は擦り切れた大学ノートを手10年1日の講義を繰り返す。学生が寝ていようが内職をしていようがお構いなし、というものであった。しかし、現職に着任して以来、Harvard, Stanford, UC Berkeley, UCLA, MIT, ETH, KTH等世界中のさまざまな名門大学の授業を参観したり、現地のTeaching Learning Centerの方々のお話を聞く機会があり、日本の大学の講義も変えていかなければならないということを痛感した。できるだけ一方通行の講義ではなく、学生とインタラクションを取りながら反応を確かめながら授業をするように心がけたが、当時はまだそのための教科書もなく方法論も確立されていなかった。学生自身もそのような教えられ方に慣れておらず質問をしても黙して語らずということが多かったし、あるときは学生に「先生、無茶振りますね。」と非難がましく言われたこともあった。しかし留学生

を対象にしたAcademic Writing, Academic Presentationの授業では、狙いが上手く行った。講義しながら質問するとすぐに答えが返ってくる、グループを組んで討議させると誰かが自主的にリーダーシップを取り、グループを上手くまとめる。この調子で行けばいいのだと確信を強めたが、日本人学生相手の授業で同じようにしてもやはりシーンとしてしまう。自分で課題を考えましょう、と言ったときには、「先生怠慢ですね。」と非難してきた。この違いは何だろう。もしかして大学に入るまでにそのような習性が身につけてしまっているのだろうか、と悩むことも多かった。

昨今では、フリップトクラスルームといって先に課題図書を読んだり、ビデオを見たりして、教室ではそれについてディスカッションするという学習法もよく見られるようになってきたし、学生もそのような教育方法に慣れてきた。留学生が増えたり、留学して帰ってくる学生が増えたりすることで、このような方法が取りやすくなってきている。10年間で明らかに教育方法が変わってきたと感じられる。語学教育には特にこういった方法が有効であろう。教育士としてこれからも新しい教育方法を模索して、定着させていきたいものである。

2015年7月31日受付

※1 シニア教育士（工学・技術）

東京大学大学院工学系研究科